



居酒屋は、言ってみれば長旅の「臨時停車駅」。翌朝も早いので、飲み過ぎは避けたいところなのだが、ついつい長時間停車してしまう＝和歌山駅前で

厚揚げ化けても言うことなし

行き先を決めたのは1月2日の夜である。その日は朝早くから仕事があった。

「正月から働いたしな。4日は休むかな」などと自分を慰めながら熱かんなをチビリチビリやっていると、テレビで「吉田類の酒場放浪記」熊野古道編3時間スペシャル」を放送しているではないか。

類さん、和歌山駅前の居酒屋でほろ酔いだ。コの字カウンターの囲まれたおでん鍋が実にうまそうに見える。いたたまれない。

4日朝、始発に乗った。5日も6日も休みにした。土日と成人の日を合わせ6連休である。(散々働いたシニアの特権だ)

和歌山へ一直線ではない。次々の図のように、名古屋や伊勢に寄り道した。道中の詳細は後回しにする。

出発3日目の6日午後8時、和歌山駅前の店先に立った。類さんが飲んでいた店である。

腹が「グー」と鳴る。座ると同時に注文した。

「厚揚げ、たまご！」

ベテランらしきおばちゃんは、なぜか「大根とたまご」を持ってきた。

「厚揚げは売り切れたねえ。大根に化けたよ」とニコリ。

地酒の熱かんなが胃の腑に染みる。言うことはない。

車中で読んだ「雪中新潟阿房列車」の一節を百聞が耳元でささやく。東京から新潟を訪れた際、萬代橋を渡った先の「大きな宿屋」で雪見酒を楽しむ場面の一節だ。

「東京にいても、新潟へ来ても、お酒を飲んでいれば、云う事はない」

至言にうなずく。

常連たちは放送されたばかりの「酒場放浪記」ネタで盛り上がりつつある。

「おばちゃんのテレビ映り、良かったでえ」

伊勢市の河崎は古くから水運の拠点として栄えた商人町。この建物は1806年建造の廻漕問屋(運送業)で、現在は古書店になっている。一帯では古い商家が保存され、資料館やギャラリー、レストランなどとして活用されている

「録画しておいたからな」

つられて当方も、番組を見て来たのだと漏らした。

「新潟から？ ヒマやなあ」とあきられ、各駅停車で来たと言ったら、さらにあきられた。

新潟は全県民 スキープロ級？

カウンターで隣り合わせた酔っぱらいおじさんたちから、新潟の印象を聞くのは興味深い。お世辞も遠慮もないのである。

「若いころ、和歌山から赤倉よう行ったわ。けど遠いな」

都会から直通スキー列車が出ていた



ころを知る世代なのだろう。
「新潟市でも雪が何日も積もるやろねえ」

「みんなスキーが上手なんですよ」新潟＝全県豪雪地帯＝全県民プロ級スキーヤー、という大いなる誤解。

でも許せる。雪国のイメージが、プラスにしろマイナスにしろ鮮明なのである。

前夜は伊勢市の駅裏で、真珠貝の貝柱をさかんに飲んでいた。

カウンターの並びには、地元熟年女性トリオ。誰かの追っかけで、全国各地を旅するそうだ。(誰の追っかけかは酔って覚えていない)

その1人が悪意なく言う。

「新潟？ 通過したことはあるな。何か見どころはありましたっけ」(このひと言は覚えていた)

人のことは言えない。伊勢市といえはお伊勢さま。他に知らなかったのだから。水運で栄えた歴史を物語る町並みが、地元の努力で守られている。手にしたチラシで初めて知り、貸自転車で巡ったのは数時間前のことだ。

別のおひとかたがつぶやいた。

「きのうな、アベさんが参拝に来ましたけど、こんな地方都市の景気はどうなるんかね」

アベノミクスの行方は分からない。当方、昼は伊勢うどん(450円)を食べ、赤福餅(210円)をほお張った。夜はこうして地酒に地魚だ。(勘定は、秘す)。微々たるものだが、内需拡大に貢献した。

「首相より、たくさんカネを落としかかも」と自慢する。

会計を済ませ、立ち上がりかけるとトリオが声をそろえた。

「地酒、一杯ごちそうするわ」

伊勢はいいところだ。